

仏教者の生き方から学ぶこと

——ハンセン病隔離反対主義者・小笠原登を通して——

小笠原 慶 彰

はじめに—医僧・小笠原登の風采

最初に一枚の写真を、見ていただきます。この人が小笠原登という人です。私と同じ名字ですが、姻戚関係はありません。これは、京都帝国大学医学部の助教授時代の写真なのですが、見ていただいた通り学生服のようなものを着ています。この時、もちろんもう学生ではありません。医者なのです。こういうふうな服装をずっとしていたのです。学生時代の学生服をかなり長い間着ていたそうで、その後も学生服のよう

なものです。そして、その上に白衣を着て診察していたということです。小笠原は僧侶でもあり、時によっては、手に数珠をはめて診察していたそうです。自分の身なりに構うような人ではなく、ずっとこういう服装をしていた。そういう感じの人だったと、記憶に留めておいてほしいのです。

一、ハンセン病小史

（一）「らい菌」の発見

これから、小笠原登の話をするわけですが、その前にハンセン病についてある程度を知ってもらいたいです。ハンセン病には、長い歴史があります。現在はハンセン病と言っていますけれども、昔は「癩（らい）病」とか、「レプラ」や「かったい」とか、いろいろな言い方をしました。不快語とか差別語と言って、使わなくなった言葉が多くありますが、そういう言葉の中の一つとして「らい病」等がありま

仏教者の生き方から学ぶこと

す。今は「ハンセン病」と言います。ただ、これから歴史的なことを話していく中で、全部「ハンセン病」と言い換えたら意味が分からなくなることもあります。だから、そのまま使う場合もあります。

ところでハンセン病のことを皆さんは知っていますか。病名は聞いたことがあっても、実際どのような病気か知らないのではないのでしょうか。ハンセン病という病名を聞いたことがある人、ちょっと手を挙げてみてください。……半数くらいです。でも、どんな病気か説明できる人となると、どれくらいでしょうか。なぜ元々「らい病」と言っていたのに、ハンセン病と言うようになったのでしょうか。まずそこから話しましょう。

「ハンセン」というのは、人の名前なのです。名前の後に「セン」が付くのはどの辺りの国の人でしょうか。他に「セン」って付く有名な人は、童話作家のアンデルセンとか、南極探検のアムンゼンです。「なんとかセン」というのは、だいたい北欧、ノルウェーやスウェーデン、デンマークの人のようです。アルマウエル・ハンセンもノルウェー人です。そのハンセンが、昔は「らい病」と言われていた、今のハンセン

病の原因菌である「らい菌」を発見します。それが一八七三（明治六）年です。それまで、ハンセン病の原因は、分からなかったのです。だから、遺伝病と言われて恐れられていた時代もありました。でも「らい菌」をハンセンが発見して、伝染病だと分かっています。ところが、そこから「ハンセン病」と呼ばれるようになるまでには、まだまだ紆余曲折があります。

まず「らい菌」は、どういう細菌でしょうか。これは現代の医学では、抗酸菌だとわかっています。人間の体の中に病原菌が入ると、それを殺そうとする機能、すなわち免疫機能が働きます。その結果、免疫力が強いと菌が死に、弱いと病気になるります。ところが抗酸菌は死なないで体内で人と共生しますが、発病もしません。すなわち感染しても条件が揃わない限り発病しないのです。結核菌もそうです。でも、免疫機能が衰える、たとえば疲れたり、栄養が足りなかったりして、体調が悪くなったりすると、時に発病することもあります。それでも必ず発病するとは限らず、発病することもあるということです。「らい菌」の感染力は、必ずしも弱くないというのが、今の医学界で言われているようです。感染力はそんなに弱くないけれども、感染して

仏教者の生き方から学ぶこと

も非常に発病しにくい。特に現在の日本においては発病する可能性は、ほとんどゼロに等しいのです。

ただ、ハンセン病の歴史は長くて、紀元前から知られていたようです。正体不明で怖い病気だと言われてきました。近代になって原因菌が発見され、伝染病と分かりましたが、それでも一度刷り込まれた恐怖心が払拭できませんでした。そんな恐怖心を生み出した理由は、ハンセン病は、神経障害を生じるために、二次的に多様な症状、たとえば兔眼（開眼のままになる）、脱毛、手足の変形、うら傷（皮膚穿孔症）などの皮膚疾患、筋萎縮による運動障害等が出たことも一因です。あるいは末梢神経を侵されるために起こる事態もあるでしょう。神経が侵されると痛さが分からなくなりま

す。私たちは、痛みがあるから危ないことを避けたり、怪我や病気の治療をしたりするので。しかし、その痛さが分からなくなったら、どうなるか。一例をあげると火傷にしても痛くない。痛くないからほっておくわけです。痛いから治そうとするのですが、痛くないからほっておきます。その結果、化膿して腐食し、指がなくなっていくということもあります。こういう風に結核等とは異なって、外見でわかる後遺症が

恐怖心を生み出すこともあったわけですから。他にも種々の誤解と偏見に基づく恐怖心が差別的な対応を正当化してきたのです。

けれども、社会が近代化していくにつれて、公衆衛生が向上し、栄養も行き届き、生活環境も変わっていきました。その結果、ハンセン病患者も減っていきました。ところが、そういうことが段々明らかになっても、それへの対応の仕方は、国によって違っていました。

（二）ノルウェー方式とハワイ方式

さつきノルウェーのハンセンが、「らい菌」を発見したと言いました。そのノルウェーでは、ハンセン病はそんなに怖くはないという考えでした。だから多少は隔離が必要な場合もあるかもしれないけれども、そんなに強制的に地域社会から引き離して、患者たちだけをどこかに追いやって、接触しないようにする必要はないという考えでした。ところが、それと全く違った考え方をしたのが、たとえばハワイです。ノルウェー方式に対してハワイ方式が対極の代表です。皆さんは、もちろんハワイは、

仏教者の生き方から学ぶこと

知っていますね。ハワイは、太平洋に浮かんでいる八つの島です。その中で、よく知られているのは、ホノルルのあるオアフ島です。そのオアフ島の東側にモロカイ島があり、カラウパパという半島があります。この半島の北は、太平洋、つまり海です。半島の南側は、断崖です。南側は断崖、北側は太平洋、そういう半島です。一八五〇年代、日本では江戸時代終わり頃になりますが、ハワイでハンセン病が流行しました。その時に、この人たちと一緒に生活をしていたらうつることになって、ハンセン病になった人は、カラウパパ半島に追いやり、そこに閉じこめることになりました。要するに隔離ですね。徹底的に強制隔離したのです。いつまで隔離が行われていたかという点、一九六九年までです。今はここが国立歴史公園になっていて、見学に行くツアーもあるみたいです。でも今でもなかなか不便なところで、よほど関心が無いと行かないようです。要するに、百五十年ほど前にハワイで流行した時に、強制隔離する政策をとったのです。ここで「一九六九年」を頭に置いておいてください。

この年にハワイでは隔離は名実ともに止めています。

今、ハワイは、アメリカ合衆国の一州ですが、実は一八六六年には、ハワイはアメ

リカ合衆国ではありません。一八九八年にアメリカ合衆国がハワイを併合して、一九五九年に、ハワイ州になりました。だから、隔離開始時は、ハワイ王国の時代ですね。王国時代から、共和制、合衆国の準州を経て州になるまでずっと、隔離していたということです。つまり、王国が始めたのだけれども、アメリカ合衆国の一州になっても、それを引き継いでずっと隔離していたのです。ただ、一九六九年には、はつきりと止めたのです。隔離政策は取らなくなったのです。そして、一九九八年になって、ハワイ州政府は元ハンセン病患者者に公式に謝罪しました。カラウパパのようにアメリカ合衆国が多少とも関与していた隔離の例としては、他にもフィリピンのクリオン島等があります。「自由」が看板のような国でも、こういうことがあったのです。

さて、ノルウェー方式とハワイ方式は対極にあります。ノルウェー方式は、普通に地域社会で生活しながら治療をしていく方法です。それに対してハワイ方式は、ハンセン病に罹った人は強制的に半島に追いやって、そこで一般の人たちからは隔絶した状態に置く方法です。これで一応は安心のように思えるわけです。しかし、実は感染して発病していない人がいるわけですから、感染予防のためには隔離は効果的ではな

仏教者の生き方から学ぶこと

かったのです。しかも感染しても発病の可能性は低いのです。でも隔離したのです。ただし、覚えておいてほしいのは、これは隔離方式の代表とされたハワイでさえも遅くとも一九六九年までのことでした。

（三）日本の隔離政策

では、日本ではどうだったか。一九〇七（明治四十）年に「癩予防に関する件」という法律が作られます。ここから隔離政策を始めます。日本はハワイ方式、つまりハンセン病患者を隔離する方法を取り始めるのです。この法律を制定した時には、隔離すると言っても、やっと全国で五カ所のハンセン病療養所ができていく段階で、まだ患者さんを全員強制隔離できません。だから、隔離すると言いながら、まだ強制的な絶対隔離ではありません。ハンセン病のために放浪せざるをえなくなっている人を隔離することにしました。

その先頭に立ったのが、「救癩の父」、ハンセン病患者を救った父と言われた光田健輔です。彼は、ハンセン病患者の強制的な絶対隔離政策を主導した人です。彼が療養

所医師の代表として、だんだんと発言力を強めます。そして一九三一年（昭和六年）には、「癩予防に関する件」に代わって「癩予防法」という新しい法律ができます。この頃には国立のハンセン病療養所もできていて、強制隔離できるという状態になってきています。それで強制的な絶対隔離政策を強化しました。「第一次無癩県運動」と言って、自分の近所で、あの人はハンセン病ではないかとなったら、密告というか、警察に通報するのです。それで警察官が来て、子どもだったら親と引き離す、大人だったら家族も仕事も何もかも全く考慮されずに引つ張られていくのです。現在ならば犯罪容疑者でも逮捕状なしには拘束できないのに、当時はハンセン病患者が警察官に連れて行かれます。そして犯罪者なら裁判がありますが、ハンセン病は医者診断だけで、不服申し立ても何も無く療養所に連れて行かれて、ほとんどの場合は、もう二度と帰れないのです。そういう政策を進めていくのです。そして戸籍まで抹消して、この世にいないということにしたりもしました。死んでないのに死んだようにして、この世にいない存在にされてしまうのです。子どもであっても大人であってもそのまま、何十年もずっと療養所で生活するのです。その後何十年にもわたる隔離政策

仏教者の生き方から学ぶこと

の継続のため、療養所に入った方たちの中には、ほとんど一生をそこで過ごし、現在もご存命の方もいらっしゃいます。そういうことがこの頃から、私たちのこの国で始まっていくわけです。

つまり、一般の人たちは、ハンセン病は怖いと思わされていたのです。光田健輔はじめ療養所の医師や隔離政策に賛成する有力な政治家や宗教家等が、それを助長したので余計に恐怖心が強化されました。そしてそれが国策になります。ハンセン病は、絶対的な強制隔離をしないといけない病気だと、国が決めていくわけです。そうなるに余計に隔離しないといけないと誰もが思っていくのです。みんなでどんどんハンセン病患者を炙り出すようにして、療養所に強制隔離していく。皆さんには、松本清張の『砂の器』を読んでほしいです。あの小説は、ハンセン病に罹った父親とその子どもが、一緒に全国を放浪するところが、そもそもの発端として設定されています。そういうことが日本のあちこちであったわけです。あの小説では、いきなり強制隔離ではなく、まず父子で全国を放浪したのです。その途中で警官が父親を連れていって療養所に入れてしまう。そして残された子どもにまつわる哀しい話なのです。あの小説

のようなことが現実に多く起こったわけです。ただ昭和戦前期には、まだハンセン病という病気について医学的に明確でないこともありましたが、例えばハワイでも強制隔離しましたし、日本で同様のことをしていたとしても、それだけで非難できないかもわかりません。ただし、その頃の隔離の是非はとりあえず措くとしても、療養所の実態は、美化して伝えられていました。実際にはいろいろな点で非難に値する酷いものであったと明らかにようになってきていることだけは知っておいてほしいです。

(四) 隔離政策の継続

ところで、一九四三(昭和十八)年頃、後にハンセン病の特効薬となる「プロミン」に効果があると分かってきました。つまり、治せる薬ができたのです。治るのならば、なおさら強制隔離する必要はなくなっていくます。そもそも、感染してもほとんど発病しないわけですし、新型インフルエンザで大騒ぎになったようなパンデミックも起こりようがないわけです。発病した患者さんだけを隔離しても、感染者はあちこちにいたはずですから強制隔離しても感染予防にあまり効果はなかったのです。そ

仏教者の生き方から学ぶこと

のうえプロミンが有効だと分かって、治るということになった後は、強制隔離する理由はより明確になりました。発病者には薬を飲んでもらえばいいわけです。でも、そうなっていないかったです。

その後、一九四八年（昭和二十三年）に「優生保護法」、これは一九九六（平成八年）以降「母体保護法」になりましたけれども、その前身の「優生保護法」が制定されました。この「優生保護法」では、ハンセン病の患者さんたちに対するいわゆる優生手術、つまり断種や人口妊娠中絶を合法化します。この時にはもちろんもうとつくの昔に、伝染病であり、遺伝病じゃないと分かっています。もちろん遺伝病でも優生手術が許されて良い訳はありませんが、ハンセン病の場合は、治療薬もできています、強制隔離も必要ないと明確になってきている段階です。その段階でこういう法律を作るのです。それから一九五三（昭和二十八）年には、「癩予防法」に換えて、さらに新しい法律、「らい予防法」を作ります。この年には、もうプロミンができて、十年経っていますが、その時にまだ強制隔離を合法のままにします。止めないのです。

この頃「第二次無癩運動」といって、以前の場合と同じようなこと、いやそれ以上

のことをするのです。みんなでハンセン病に罹っている人を見つけだして、療養所へ送るのです。そういうことが一九四七（昭和二十二年）頃から行われて、「らい予防法」制定後にも、まだ続くどころかより厳しくなります。ところが、国際的には開放的な治療の方向に変わっていています。一九五八年には東京で開催された第七回国際らい学会で、強制隔離政策の破棄が決議されています。一九六〇年には国連の機関WHOの「らい専門委員会」が「一般外来での治療」を勧告した報告書が出されます。

（五）隔離政策からの脱却と国の反省

そうこうしているうちに一九六四（昭和三十九）年には光田健輔が八十八歳で亡くなります。この人は先述のように強制隔離政策の先頭に立っていた人です。しかし、その死からでもなお六年、一九七〇（昭和四十五年）年になってやっと「日本らい学会」で、療養所退所、院外観察推進が論議されています。小笠原登は、同年の十二月に遷化します。この年は「日本万国博覧会（Osaka Expo'70）」が開催されています。小笠原は、「万博に行きたい、行きたい」と言っていたらしいですが、死の直前

仏教者の生き方から学ぶこと

まで好奇心の旺盛な人だったのだと思います。

この後に、患者さんたち自身の運動（「らい予防法闘争」等）も功を奏して、だんだん「らい予防法」は不適切ということになっていきます。とはいえ、それから二十五年も後の一九九五（平成七）年になってやっと、「日本らい学会」で「らい予防法」を存続させてきたことに対して、「隔離強制へ向けて恐怖心を煽ったのは取り返しのつかない重大な誤りである」と反省が表明されます。その翌年に「らい予防法廃止に関する法律」が成立して「らい予防法」が廃止されます。「優生保護法」も「母体保護法」になって、ハンセン病の患者さんたちに対するいわゆる優生手術ができなくなります。この時、当時の厚生大臣が謝罪している姿がテレビで放送されましたので、覚えている人もいるでしょう。「らい予防法」は廃止され、強制隔離政策は誤りだったと謝罪したわけです。

でもそれならば、療養所にいた人たちの人生はどうなるのでしょうか。ハンセン病だと診断されて、強制的に連れてこられて、そこで人生送る以外の選択が国によって否定されたのですから。それで元患者さんたちは国家賠償を求めて提訴しました。そ

れが一九九八（平成十）年です。その判決が二〇〇一（平成十三）年に出て、国は負けます。国策としての強制隔離は間違いだったと、熊本地方裁判所の判決が出ました。そして総理大臣が「控訴しない」と決断し、厚生労働大臣が正式に謝罪しました。それで元患者側の勝訴、国側の敗訴が確定しました。

しかしその後も、たとえば裁判が行われたのと同じ熊本のホテルで、ハンセン病元患者さんたちの宿泊拒否事件がありました。二〇〇三（平成十五）年のことです。他にも多くの同様の事件が起こっています。つまり、判決が出て確定し、国も謝罪したけれども、まだハンセン病の人たちに対して「怖い」という感情が消えてないのです。こういう不合理な連鎖を断つために、段々と「らい病」という言い方を止めて「ハンセン病」と言い換えるようになったのです。

これが明治以降、日本のハンセン病政策の大まかな流れであり、「らい病」が「ハンセン病」と言われることになった理由なのです。とにかくハンセン病は、怖い病気でも何でもなかったのです。国策としては、それを怖い病気だと言って、そうでないことがはつきりしてからも、強制的な絶対隔離政策を変更しないままだったのです。

仏教者の生き方から学ぶこと

全国には、二〇〇九（平成二十一）年の今でも十三カ所の国立ハンセン病療養所があり、二千六百人弱の元患者さんたちが生活しておられます。平均年齢は八十歳強です。「らい予防法」は、もうとくに廃止されたのですが、何十年間にもわたって、家族や地域社会と隔絶されて療養所で生活してきた方たちは、今もその生活を続けています。元患者さんたちは療養所を終の棲処として住み続けているのです。この国は、そういう結果をもたらすようなことを国策として行ってきたのです。それに対して、今日の話の主役、小笠原登はどういうことをした人だったかということをお話します。

一、小笠原登の闘い

（一）小笠原登の前半生

小笠原登は、一八八八（明治二十一）年に愛知県海部郡甚目寺町の真宗大谷派太子

山圓周寺で生まれました。大谷派は、京都の眞宗本廟（通称、東本願寺）を本山とする眞宗の一派です。眞宗の教えを開いた人は、親鸞です。高校とか中学校の歴史でも習いますが、鎌倉時代の僧です。今から七五〇年ほど前、一二六二（弘長二）年に亡くなりました。生まれたのは、一一七三（承安三）年です。その親鸞が開いた眞宗の教えが、今も我々に伝わっているわけです。けれども、その眞宗にもいろいろな宗派が成立しました。一つは大谷派、大派と言います。その大派の宗門関係校は、本学もそうですし、大谷大学もそうです。それから、西本願寺の方、本願寺派ですが、本派と言います。その宗門関係校は、龍谷大学や京都女子大学等です。同じ眞宗なのに、いろいろあります。同じ親鸞の教えに基づく宗派は、他にも佛光寺派とか、高田派、木辺派、興正派、出雲路派、三門徒派等があります。眞宗十派（眞宗教団連合）とか二十二派とか言われますけれども、同じ眞宗でもいろいろあるのです。でもどれも親鸞の教えに基づいているはずですよ。

とにかく小笠原登は、その眞宗大谷派の寺に生まれました。だから大谷派の旧制中学校、今の大谷高校になりますけれど、そこを卒業しました。一九〇五（明治三八）

仏教者の生き方から学ぶこと

年のことです。その頃に旧制中学校を卒業する人は多くありませんでした。小笠原登は、その段階で真宗大谷派の住職資格を得ました。それから旧制第三高等学校を経て、京都帝国大学、今の京都大学医学部に行き、医師になります。僧侶であり、医師でもあるわけです。

その後はずっと亡くなる直前まで医師として仕事をします。京大の薬物学教室を経て、皮膚科泌尿器科教室で医師として診断や治療に当たります。この頃からもうすでにハンセン病は隔離する必要はないと言いはじめています。これは一九一五（大正四）年頃ですから、一九三一（昭和六）年の「癩予防法」以前のことで、隔離が段々と進んでいく頃です。小笠原登は、隔離の必要はない、通院治療で良いと主張しています。この後、一九二五年（大正十四）年には医学博士になり、皮膚科泌尿器科の第五診察室、これがハンセン病を専門に治療しているのですが、そこで外来治療をします。外来、つまり患者さんが家から通院しながら治療していくのです。

その当時、ハンセン病というのは「うつつたら怖い病気だ」と、医師や看護師でも思っていました。だから他の病院では完全防備で手袋はめて、顔も全部覆って、そう

して患者さんの診察や治療をしているのです。うつったら怖い、自分も療養所には行きたくない。家族が引き離される。そうなりたくないから、医療関係者でも、予防しないといけないと思っていたのです。ところが、小笠原登は、最初に見てもらった写真のように学生服みたいなものを着て、その上に白衣だけ、手袋も何もしていません。患者さんが来たら、そのまま素手で触診する。それも診察には長い時には一人一時間もかけたそうです。そうやって診断していくわけです。

（二）ハンセン病の治癒可能性に対する信念

その頃、後に小笠原登のもとで研鑽を積み、さらに後年には厚生省医務局長になる大谷藤郎という人が、まだ京大医学部の学生でした。大谷さんは、一九九四（平成六）年に「らい予防法」廃止につながる「大谷見解」を出した人です。その大谷さんのお母さんの実家が圓周寺の檀家だったので「一度、小笠原先生を訪ねてみなさい」と言われて会いに行きました。そしたらそういう風にして診察しているから、驚いたわけです。大谷さんは「まあ、また来なさい」と小笠原登に言われます。そうして何

仏教者の生き方から学ぶこと

度か行くわけですが、自分は怖くてしようがなかったと回顧しています。大谷さんは、「うつるのではないか、うつたらどうしよう。怖い、怖い」と思っているけれど、小笠原登は平気なのです。どうして平気だったのでしょうか。

もちろん医学者として、自分で診察し、治療し、データを取り、分析した上で科学的な根拠を持っていたわけです。しかし、それだけではなく、祖父からの影響がありました。小笠原登の祖父も、圓周寺の住職をしながら医者でもありました。江戸時代から明治初期の医僧なのです。この祖父も反骨の人で詳しく話したいのですが、端折ります。とにかく祖父はハンセン病の治療法をある政治犯を匿った礼として教えてもらいました。つまり、もうこの頃から治療法があると知られていたのです。そして祖父は、その頃からハンセン病は治る病気だと信じていて、自坊にハンセン病患者が来ると、平気で泊めて治療していました。小笠原登は、まだ幼い頃ですが、一緒に生活していたわけです。自坊、すなわち家で治療しているのですから。しかし何年も一緒に生活していても自分はハンセン病になっていない。感染はしたかもしれないけど発病はしてない。平気だ、大丈夫だと、そういう信念があったわけです。自分自身が実

証しているということです。だから平気で素手で触診するのです。

(三) 「隔離」への反対表明

ところがこの頃には、さつき光田健輔が主導して進めた絶対的な強制隔離のためのハンセン病療養所も必要なできていました。隔離は、国策です。国の決めた政策、国の決めたやり方、法律で決めているのです。それなのにそれに反対するとはどういうことか。医者のかせに法律で決めていることを守らないのはけしからんということ。そのずっと前から小笠原登は、隔離は必要ないと言っていますが、だんだんと隔離政策が強化され、立場は悪くなっています。その段階で、純粹な医学論争をやったら隔離する必要はないとなっただけです。伝染はするかもしれないが、発病はほとんどしないと分かっているのです。発病していない感染者は、そこここにいるのです。つまり隔離する必要はない、というより隔離に効果はなく、通院治療こそ必要だったので。医学的にはそういうことはわかっています。ところが小笠原登が主張し、実行していることは、国策からしたら、許されないわけです。その結果、ど

仏教者の生き方から学ぶこと

ういうことになっていくのでしょうか。

もちろん「あなたの主張は正しい」と小笠原登に協力する人もいました。その人たちの中でもとりわけ協力的な人に三浦大我という人がいました。「参玄洞」という号です。三浦大我は、本派の真宗僧です。彼は「部落解放同盟」の前身である「水平社」を被差別部落の人たちが結成していく運動に協力し、力づけた人です。他にも「黒衣同盟」と言って、黒衣、つまり僧侶の黒い衣のことですが、真宗僧は誰でもどんな時でも黒衣だけを着ようと主張した団体の中心人物でもありました。つまり真宗僧が衣の色で、紫が一番偉いとか、朱がその次で、浅葱がその下だとか、僧位によって着る衣の色を変えるところというのは真宗の教えではない、僧位そのものもおかしいと主張した人です。被差別部落の人たちが差別に反対して「水平社」を立ち上げることに協力し、僧位にも反対する、そういうことを主張して、実行した人です。要するに不合理な差別を否定し、「平等」ということを強く訴えた人です。ハンセン病の隔離政策にも懐疑的でした。その三浦大我が、小笠原登の主張に共鳴します。それでその当時、三浦が主筆をしていた仏教関係の新聞『中外日報』で、小笠原登の主張を談話と

して発表させます。

また小笠原登の兄、小笠原秀實という人も、弟を応援します。というより登が兄の思想にかなり影響されていたと思います。秀實自身は、「自由」を愛する人でした。

「反権力」のアーキスト、つまり権力は信じられない、何をするか分からない、権力は民衆を抑圧する、支配されたり、抑圧されたりしたくない、そういう考え方を持った人です。秀實は、圓周寺の住職で、もちろん真宗僧ですが、大谷大学や佛教大学の教員もしていました。真宗の教えは、たとえば一向一揆とか本願寺合戦とかのよう

に反権力的な動きを促す側面もあると思うのですが、秀實はそういう面の考え方を強く持っていたのです。その秀實に影響されたと思います。そして三浦大我と小笠原秀實は、もともと知り合いでもありません。そんなことから「中外日報」というマス・メディアで小笠原登の考え方を発表させたのでしょうか。

（四）抑圧された小笠原登

ところが、これが思わぬ事態を招きます。小笠原登が学会で発表し、いろいろ専門

仏教者の生き方から学ぶこと

誌に書いていただけなら、それは学界の中に止まった話であつたわけです。でも『中外日報』は、仏教関係の新聞とはいえ、専門家以外の人も読むわけです。隔離は国策なのに、それに反対することをそういう新聞で堂々と言ったのです。一方、療養所の医師の人たちは、国策としての隔離政策に沿っているのですから、隔離反対を一般に向けて主張されたら当然反論します。そこで争いになります。それが純粹に医学的な論争ではなく、一九四一（昭和十六）年の「第十五回日本癩学会」で、「国策なのだから隔離する。小笠原登の主張は、受け入れられない」とされてしまいます。要するに、抑えつけてしまうわけです。それで、小笠原登は、それ以後、ほとんど発言を封じられます。

この時のことが一般新聞とか週刊誌にどんな取り上げ方をされたでしょうか。たとえば、当時の週刊誌では、「らいは遺伝か伝染か」という見出しになっています。「遺伝か伝染か」という見出しで、問題がすりかえられています。小笠原登は遺伝だとは全く言っていない。ところが、小笠原は「らいが遺伝だと変なことを言う医者だ」といった見出しを付けられるのです。記事の内容を読んだらそうじゃないと分かりま

すが、見出しだけだと小笠原登はハンセン病を遺伝だと言っている、変わり者の医者だというように取れるわけです。これは、普通に誰でもが読むような週刊誌だったのです。そうして「小笠原は変わり者の医者」とレットテルを貼られてしまつて、発言しても相手にされない、そういう状態に置かれていったのです。

この年の十二月八日はどんな日でしょうか。十二月八日と聞いたら何を思い浮かべますか。この日は、釈尊が悟りを開いた日、成道会ですね。しかし、この年の十二月八日は、特別の日です。ハワイのパールハーバー、すなわち真珠湾を日本軍が奇襲した日です。つまり、アメリカ・イギリスと戦争を始めた日です。日本は、一九三七(昭和十二)年以来、当時の中華民国と戦争をしていました。さらに米英と戦争をするということになったのです。「第十五回日本癩学会」というのは、その直前に開催されたのです。つまり、戦争がさらに拡大されていく、そういう国策が遂行されていく時です。ハンセン病隔離も国策でした。国策に反するということが徹底的に非難される時代になっているのです。その上にハンセン病患者を隔離することは、不良人種の撲滅、つまり優生思想です。そんな病気に罹るやつは撲滅だ、戦争にも行けない、

仏教者の生き方から学ぶこと

役立たずはいらないとなつていきます。戦争に向かつて一致団結していこうという時代になつたのです。国策に反することが正しいなんてとんでもないことを言う、そんなこと言う人間は抹殺してしまえとなるのです。それで発言を封じられてしまう。小笠原の主張は、封じられ、彼は変なことを吹聴する人間ということにされてしまったのです。

さて、戦争が終わつたらどうなつたか。戦争が終わつたのをいつにするかは諸説ありますが、一九四五(昭和二十)年八月十五日、この日は、大日本帝国が連合国の降伏勧告を受け入れたことを国民に公表した日です。戦争が終わつて、敗戦国日本の価値観は大きく変わりました。それだったら、ハンセン病に対する国策の性格も変わって良かったはずですよ。ところが変わらなかつた。先述のように新しい「らい予防法」が戦争終結後八年も経つて、一九五三(昭和二十八)年に制定されるのです。なんだか奇妙なのです。戦前は、一致団結して国策を遂行するためだと言っていたのだから百歩譲つて、まだ筋は通るようにも思えます。でも戦争も終わつて、そういった価値観も変化し、八年も経っているのに、まだ同じことを新たな法律で決めるのです。そ

それを疑問視しないということは、一般にもハンセン病は恐ろしいと信じられていたからでしょう。このように政治的権力者による根拠のない刷り込みの結果が、取り返しのつかない重大な事態を招くということがわかります。

(五) 小笠原登再評価への道程

それでは一体、発言を封じられた後、小笠原登の主張がいつから見直されたのでしょうか。戦後の生存中も遷化以降も、一部のハンセン病関係者以外には小笠原は忘れられたままでした。たとえば、一九七五(昭和五十)年に日本社会福祉学会第二十三回大会が、名古屋の日本福祉大学であった時のことです。その時に小笠原登の存在を偶然知った服部正という社会福祉学者が、小笠原の隔離反対思想について学会で発表します。これはハンセン病関係者以外では、最も早い再評価でしょう。しかし、その頃、学会の雰囲気はどうだったかと言うと、「変わったことを言う」という感じも少なくなかったということです。つまり、当時の社会福祉学会でもまだ隔離の考え方が、否定されていないのです。服部は、隔離が当然だろうという雰囲気もある中で非

仏教者の生き方から学ぶこと

難がましい見方もあったと言っています。隔離肯定の考え方が、まだ基本的に変わってないのです。

それが先述のように、患者さんたち自身の運動があり、またいわゆる外圧もあり、さらに医学界の変化もあって、らい学会が誤りを認め、法律も廃止され、さらに国が裁判で負けるところまで、ざっと三十年もかかってやっと変化したのです。二〇〇一（平成十三）年前後には、大きく変わっていました。その頃から強制絶対隔離の主導者「救癩の父」光田健輔に対する評価が「光田はちょっとおかしかったなあ」というようになってきます。そして逆に小笠原登が脚光を浴びてくるのです。真宗大谷派は、一九九六（平成八）年にハンセン病隔離政策協力に対して謝罪表明します。同派は、昭和の初め頃、小笠原登が隔離反対の主張をしていた時に、「大谷派光明会」を組織して隔離政策に協力していたのです。ところが熊本地裁で判決が出た後、小笠原の再評価が確定的になると、『小笠原登―ハンセン病強制隔離に抗した生涯』という本を出したのです。二〇〇三（平成十五）年になってからのことです。熊本の国賠訴訟判決が確定した後です。この背景には、教団内で長期間のいろいろな確執があった

のだろうと思いますが、結果的には何だか手のひら返すような感じと言いたいです。ついでに光田と小笠原は、世俗的な名誉という点でどう異なっていたかを見ておきましょう。実は、光田健輔がはるかに大きな名誉を受けており、小笠原登は段違いに見劣りする評価しかされていません。たとえば光田は、文化勲章を受章し、叙正三位勲一等瑞宝章を追贈されました。しかし、小笠原は、勲四等旭日小綬章の受章です。他にも光田は、ダミアン・ダットン賞や朝日賞（社会奉仕部門）を受賞し、岡山市および防府市名誉市民になりました。小笠原は、貞明皇后医学振興賞を受賞し、二〇〇七年になってやっと出身地の甚目寺町名誉町民になりました。過去の評価は、こういうことですが、現在の評価は逆転してきつつあるわけです。

三、真宗教団（宗教教団）の功罪

さて、真宗教団の中でもとりわけ大きいのは、大派と本派、いわゆる本願寺教団です。でも実は、本願寺は、親鸞が建てたものではありません。親鸞が亡くなった後にで

仏教者の生き方から学ぶこと

きました。親鸞は真宗の教えを開きました。そして私は真宗信徒で、親鸞の教えを信じています。けれども、その教えを基盤にして作られた教団は、必ずしも、信者の苦境をサポートしてくれるとは限らない、苦しい立場に追いやるようなこともする、と言いたいのです。小笠原登がまさにそうでした。教団は、自宗派の僧であった小笠原登をサポートしなかった。むしろ窮地に追いやる状況を作ることに協力しました。ところが亡くなって何年も経って、やっと名誉回復したわけです。しかし、小笠原登は教団を怨んでいたでしょうか。

ここからは私の考えですけど、怨んでいなかったと思います。なぜかと言うと小笠原登は、亡くなった時に自坊の圓周寺副住職という立場で葬儀をされています。自分は真宗僧だという自覚が小笠原登にはあったと思います。そして最後は真宗僧、副住職として葬送された。だから怨んでいたとは思えないのです。そうした小笠原登の思いには、親鸞の生き方も反映されていたと思います。親鸞自身が、犯罪者として流罪にされています。京都から越後、今の新潟県に追放されました。当時の朝廷から師の法然とともに「お前たちはおかしな事を言う、変な僧侶だ」と断罪されて、僧の資格

を取り上げられて、藤井善信という俗名で流されるわけです。でも親鸞は自分の信じたことを絶対に曲げなかったのです。親鸞が本当に変なことを言っていたのだったら、そのままそれで終わったでしょう。けれど親鸞の教えは、それから七五〇年続いていきます。どうしてなのでしょう。その教えを信じ、守ろうとする人たちがいて、教団を形成したからです。

ところがある時代の状況次第で、自分が本当に信じたことを主張する真宗僧や信者が真宗教団によってサポートされないということもあります。小笠原登がそうでした。けれど、親鸞自身も同じ境遇だったということが重要です。自分が根拠を持って正しいと信じ主張していることが、時の政治的権力者にとって不都合であったため、「お前はおかしい」と言われて、犯罪者として流罪にされた。でも自分を曲げなかったのです。教団も宗教的権威というよりもある意味では政治的権力の色合いが濃いですから、政治的権力者と同じことをする場合もあります。また政治的権力を維持するためにより大きな政治的権力と妥協することもあります。

ただややこしいのは、親鸞の教えが今に伝わっているのは教団があったからだとい

仏教者の生き方から学ぶこと

うことです。教団がなかったらどうなっていたか分かりません。特に、本願寺中興の祖とされる第八世蓮如が、本願寺教団を大きくしたから、つまり教団がこれだけ大きくならなかつたら、親鸞の教え、真宗を知らない人も多くいたはずです。けれども教団が存在したから、教えが伝わり、知っている人も多くいる。現在では、本学のように、そういう教団やその関係者が作った学校も少なくありません。教えが世代や空間を超えて伝わっていく、これは教団があるからです。

私はいつもそこで悩みます。親鸞は本願寺を建てたわけでも教団を作ったわけでもない。まして教団は、時には政治的権力に媚を売り、教義を過つこともあります。現代でも、たとえば第二次世界大戦の時には、戦争遂行に協力しましたし、被差別部落の人たちに差別的な法名をつけていたことが発覚したようなこともあります。そんな風に過つこともあるのです。けれど、その教団がなかったら親鸞の教えは伝わってこなかったでしょう。その矛盾をどう考えたらいいのでしょうか。いつもそう思うのです。どう考えたら良いのでしょうか。

ただ小笠原登は、決して教団を怨んではいなかったと思います。最後は自分の考え

方がきつと教団にも社会にも支持されていくだろうと思つて、亡くなつていったと思うのです。そして、実際にそうなつたのが歴史の経過であるわけです。残念なのは、政治的権力も持つ教団が最初から小笠原登の主張を支持していたら、ハンセン病に対する国策がどう変化していただろうか、そうすれば患者さんたちの人生がどう違つていただろうかと考え込んでしまいます。

四、ハンセン病賠償裁判の報道

ここでもう一つ、信仰とか宗教とか、そんなこと私はあんまり関心がないという人に、そういう人でも、仏教者のこういう生き方から影響されることもあるのではないかと、ということをお話しておきます。

たまたま私が小笠原登を調べていて知ったのですが、『女子アナ失格』という本があります。藪本雅子さんというNTVの元アナウンサー・報道記者が書いた本です。この藪本さんは、中学、高校の頃にタレントになろうと思つて東京に行つて、挫折し

仏教者の生き方から学ぶこと

て帰ってきて、京都の高校を出ます。そして、また東京の大学に行き、アナウンサーになります。ある意味で夢は実現できたのですが、アナウンサーをやっても面白くない。やりたいのはこれじゃないと思って、報道の仕事に変わった時に、出会ったのがこのハンセン病の問題でした。そしてハンセン病の問題を取り上げて行く中で、小笠原登のことを知りました。こんな昔から隔離反対を言っている人がいたのだと知ります。小笠原登の弟子、先述した大谷藤郎さんに紹介されたのです。後には圓周寺を訪ねていって、今の住職や坊守に話を聞いたりもします。

そして、ハンセン病元患者さんたちが置かれてきた状況をテレビで報道することに努力します。テレビの報道番組では、二〇〇一（平成十三）年の判決が出る頃まで、ハンセン病の問題が広く報道されることはありませんでした。一般の人はほとんど関心がなく、テレビでも大きく取り上げることがしなかつたのです。ただNHKは、例外的でしたが視聴率は高くなかつたでしょう。それをこの藪本さんが、ハンセン病の人たちと出会い、大谷さんに取材し、小笠原登を知り、ハンセン病の問題を大きく取り上げさせることが自分の使命だと思ったのです。それで報道記者としてあちこち駆

けずり回って、テレビのニュースで何秒取るか、報道番組で何分流せるかと力を尽くします。他局の記者にも働きかけて、報道に大きな流れを作ったと思います。そういう仕事をしたのです。この本を読んでもらったら分かりますが、ハンセン病のことが、特にテレビ報道で大きく取り上げられるようになったきっかけは、この人が作ったと言ってもよいように思います。

おわりに―仏教者の生き方とは

小笠原登はきつと、親鸞の生き方を信じて、自分の考えはいつか受け入れられるだろうと思っていたでしょう。教団は、支えてくれなかったなという思いはあって、何か残念な気持ちはあったかもしれませんが。でも最後は副住職として葬送されたことを喜んでいたと思います。小笠原登は親鸞の生き方を通して、自分の主張が正しいのならば、いずれ受け入れられると信じていたと思います。藪本さんも、別に真宗信徒でないと思いますが、小笠原登との出会いはあったのです。宗教とか信仰を通してでは

仏教者の生き方から学ぶこと

ないけれど、小笠原登の生き方を通して影響を受けたのです。親鸞はもちろん仏教者です。小笠原登も仏教者です。こういう仏教者の生き方が世の中を少しは変えて、意義ある歴史を残すことに、何かの力になったと思います。私は、そういう仏教者であれたら嬉しいといつも願っています。みなさんはどうでしょうか。

ありがとうございました。

—二〇〇九年二月一日—

小笠原登に関する主要な資料

著書・資料等

大場昇「やがて私の時代が来る—小笠原登伝」皓星社、二〇〇七年。

玉光順正・菱木政晴・河野武志・山内小夜子・雨森慶為編『小笠原登—ハンセン病強制隔離

に抗した生涯』（ブックレットNo.10）真宗大谷派宗務所出版部、二〇〇三年。

大谷藤郎「ハンセン病・資料館・小笠原登」藤楓協会、一九九三年。

大谷藤郎「らい予防法廃止の歴史—愛は打ち克ち城壁崩れ陥ちぬ」勁草書房（医療・福祉シ

リーズ66）、一九九六年。

滝沢英夫・原田禹雄編『小笠原先生業績抄録』京都大学医学部皮膚病特別研究施設、一九七

一年。

藤野豊「日本ファシズムと医療」岩波書店、一九九三年。

藤野豊「『いのち』の近代史―「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者」かもがわ出版、二〇〇一年。

八木康敏「小笠原秀実・登―尾張本草学の系譜」（シリーズ民間日本学者17）リプロポ―ト、一九八八年。

藪本雅子「女子アナ失格」新潮社、二〇〇五年。

論文

大谷藤郎「わが師・小笠原登―ハンセン病隔離政策に反対しつづけた医学者」『部落解放』第四八六号、二〇〇一年。

小笠原眞「小笠原登―特にハンセン病に関する博士の先見性について」（愛知学院大学）文学部紀要」第三七号、二〇〇七年。

小笠原慶彰「仏教社会福祉の固有性についての一考察―小笠原登の反隔離主義から学ぶこと」（京都光華女子大学研究紀要）四十七号、二〇〇九年。

川崎愛「小笠原登とハンセン病対策」（平安女学院大学）研究年報」第四号、二〇〇三年。
長尾英彦「救ライに捧げた四十年―小笠原登博士の生涯」上・中・下「郷土研究」（愛知県郷土資料刊行会）九―十一号、一九七六年。

仏教者の生き方から学ぶこと

服部正「反隔離主義の先駆的実践者・小笠原登」『社会問題研究』二十五号、一九七五年。
服部正「福祉の倫理―小笠原登の生涯」『東方界』八号、一九八〇年。
八木康敏「小笠原登事始」『思想の科学』（第七次）第六十二号、一九八五年。
山本正廣「近代におけるハンセン病治療と病理観―小笠原登の場合」『仏教大學大學院紀要』
三十二号、二〇〇四年。

（本講座の内容は、二〇〇九年度京都光華女子大学特別研究費による研究成果の一部である。）